

# 第16章

## パリークシットは どのようにカリ時代を受け入れたか

### 第1節

सूत उवाच

ततः परीक्षिद् द्विजवर्यशिक्षया  
महीं महाभागवतः शशास ह ।  
यथा हि सूत्यामभिजातकोविदाः  
समादिशन् विप्र महद्गुणस्तथा ॥ १ ॥

*sūta uvāca*

*tataḥ parikṣid dvija-varya-śikṣayā  
mahīm mahā-bhāgavataḥ śaśāsa ha  
yathā hi sūtyām abhijāta-kovidāḥ  
samādiśan vipra mahad-guṇas tathā*

*sūtaḥ uvāca*—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *tataḥ*—その後; *parikṣit*—マハーラージャ・パリークシット; *dvija-varya*—偉大な再誕者であるブラーフマナ達; *śikṣayā*—彼らの教えによって; *mahīm*—地球; *mahā-bhāgavataḥ*—偉大な献愛者; *śaśāsa*—治めた; *ha*—過去に; *yathā*—彼らがそれを話したように; *hi*—確かに; *sūtyām*—彼の誕生の時に; *abhijāta-kovidāḥ*—誕生の時にいた熟達した占星術師達; *samādiśan*—彼らの意見を言った; *vipra*—おおブラーフマナよ; *mahad-guṇaḥ*—偉大な特質; *tathā*—それに対して真実である。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「博識なブラーフマナたちよ。こうしてマハーラージャ・パリークシットは、再誕者のブラーフマナでもっとも優れた人物たちの教えを授かりながら、主の偉大な献愛者として世界を統治するようになった。かれが誕生するとき、熟達した占星術師たちが予言したその優れた特質で世を治めたのである」

### 要旨解説

マハーラージャ・パリークシットが誕生するとき、造詣の深い占星術・ブラーフマナが、かれの特質を予言しています。主の偉大な献愛者だったからこそ、そのような質をすべて発揮したのです。ほんとうに大切な質は主の献愛者になることであり、献愛者であってこそ、持つべきふさわしい優れた質がすべて発揮されます。マハーラージャ・パリークシットはマハー・バーガヴァタ (*mahā-bhāgavata*) ・一流の献愛者であり、献愛奉仕の科学に長けていることはもちろん、超越的な教えをとおして人々を献愛者に変貌させることもできます。ですから、最上の献愛者であるパリークシットは、国を治める方法をシャーストラにもとづいて助言できる偉大な聖者や博識なブラーフマナたちに助言を求めていました。そのような偉大な王は、ヴェーダ經典に残された偉大な権威者たちの教えに従うことを義務としているからこそ、選挙で選ばれたような代表者たちより信頼に値します。毎日新しい法案を考えだし、さまざまな問題に対応しようとする非現実的な愚か者など、必要ではなかったのです。規則や原則は、マヌ、ヤーギャヴァルキヤ、パラージャラのような大聖者や解放された人物たちによってすでに用意されていますから、あらゆる時代や場所に適応しています。ですから、このような原則が基準とされるべきであり、そのなかにはまちがいや欠陥はありません。マハーラージャ・パリークシットのような国王たちには補佐役の顧問たちがいましたが、そのなかには偉大な聖者あるいは一流のブラーフマナが揃っていません。かれらは報酬をもらっていたわけでもありませんし、また報酬を必要としていたわけでもありません。とくにお金を払わなくても最上の助言を得ていたのです。かれら自身が *sama-darśī* (サマ・ダルシー)、すなわち、人間でも動物でも、だれをも等しく見ていました。人間だけは守られ、哀れな動物は殺される——そのような指示を王たちに勧めていたのではありません。その顧問たちは愚かな人間ではなく、愚者の樂園の代表者でもありません。自己を悟った魂たちばかりでしたし、また国に住むすべての生き物がどうすれば現世でも来世でも幸せに生きられるかをよく知っていました。快樂主義者が言う「食べて、飲んで、楽しむ」という哲学にはまったく関心がありません。真の意味での哲学者であり、人間生活の使命を心得ていたのです。このような義務感にもとづいて王の顧問たちは正しい指示を出し、みずからが主の資格をそなえる献愛者である国王や代表者は、国の繁栄のためにその教えに徹底的に従いました。マハーラージャ・ユディシュティラやマハーラージャ・パリークシットの時代の国は、真の意味で繁栄に満ちていました。なぜならその国では、人間でも動物でも、不幸なものはだれ一人いなかったからです。マハーラージャ・パリークシットは世界の繁栄に満ちた国に君臨する理想的な王だったのです。

## 第2節

स उत्तरस्य तनयामुपयेम इरावतीम् ।  
जनमेजयादींश्चतुरस्तस्यामुत्पादयत् सुतान् ॥ २ ॥

sa uttarasya tanayām  
upayema irāvatīm  
janamejayādīṁś caturas  
tasyām utpādayat sutān

saḥ—彼; uttarasya—ウツタラ王の; tanayām—娘; upayeme—結婚した; irāvatīm—イラーヴァティー; janamejaya-ādīn—マハーラージャ・ジャナメージャヤを筆頭とした; caturaḥ—4; tasyām—彼女の中に; utpādayat—もうけた; sutān—息子達。

パリークシット王はウツタラ王の娘と結婚し、マハーラージャ・ジャナメージャヤを長男とする4人の子をもうけた。

#### 要旨解説

マハーラージャ・ウツタラはヴィラータの子で、マハーラージャ・パリークシットの母方の叔父にあたります。マハーラージャ・ウツタラの娘であるイラーヴァティーは、マハーラージャ・パリークシットのいとこ姉妹にあたりますが、いとこ兄弟と姉妹は、同じゴートウラ・家族に属していなければ結婚することが許されていました。ヴェーダ式の結婚では、ゴートウラ・家族の重要性が強調されています。アルジュナは、母方の姉妹であるスバドラーと結婚しています。

ジャナメージャヤ ラージャルシ王の一人で、マハーラージャ・パリークシットの名高い息子です。母の名前はイラーヴァティー、またはマードウラヴァティーという情報もあります。マハーラージャ・ジャナメージャヤは2人の息子、ギャーターニーカとシャンクカルナをもうけました。クルクシェートラの巡礼地で何度か供儀祭を催し、シュルタセーナ、ウグラセーナ、ビーマセーナ2世という3人の弟がいます。また分の偉大な父・マハーラージャ・パリークシットへの不法な呪いに復讐することを決意し、タクシャシラー（アジャンタ）に攻め入りました。父を噛んで死なせたタクシャカを含む蛇の種族を殺すためのサルパ・ヤギヤという大規模な供儀祭を執行しました。しかし、有力な半神や聖者たちの依頼を受け、蛇族を殺す決意を変えざるをえませんでした。儀式は中止したものの、参加した人々に適切に報酬を与えたことで、すべての人々を満足させました。その儀式にはマハームニ・ヴァーサデーヴァも参加し、

王のまえでクルクシェートラの戦いの歴史を語ってきかせました。のちに、ヴァーサデーヴァの命令で弟子のヴァイシャンパーヤナが、『マハーバーラタ』の主題について王に話しをしています。ジャナメージャヤ王は、偉大な父の時ならぬ死をたいそう悲しみ、もう一度父に会いたいと強く願い、偉大な聖者ヴァーサデーヴァにその願い叶えてはもらえないか、と頼みます。ヴァーサデーヴァはその望みを満たしました。父が姿を現わしたあと、かれは父とヴァーサデーヴァに深い敬意をこめた壮大な崇拜の儀式を行ないました。心から満足したジャナメージャヤ王は、儀式に参加したブラーフマナたちに寛大に慈善を施しました。

### 第3節

आजहाराश्वमेधांस्त्रीन् गुरायां भूरिदक्षिणान् ।  
शारद्वतं गुरुं कृत्वा देवा यत्राक्षिगोचराः ॥ ३ ॥

*ājahārāśva-medhāms trīn  
gaṅgāyām bhūri-dakṣiṇān  
śāradvatam gurum kṛtvā  
devā yatrākṣi-gocarāḥ*

*ājahāra*—執行した; *śva-medhān*—馬の供儀祭; *trīn*—3; *gaṅgāyām*—ガンジス川のほとりで; *bhūri*—十分に; *dakṣiṇān*—報酬; *śāradvatam*—クリパーチャーリヤに; *gurum*—精神指導者; *kṛtvā*—選らんで; *devāḥ*—半神達; *yatra*—その中で; *akṣi*—目; *gocarāḥ*—範囲内に。

マハーラージャ・パリークシットは、自分を導いてくれる精神指導者としてクリパーチャーリヤを選んだあと、ガンジス川のほとりで馬の供儀祭を3回執行した。列席した人々には報酬が充分になされ、儀式がおこなわれているあいだ一般の人々でさえ半神たちの姿を見ることができた。

### 要旨解説

この節からは、高い惑星にいる住人たちが惑星間を行き来するのはかんたんだったことがわかります。『シュリーマド・バーガヴァタム』には、天界から半神たちが地球を訪れ、有力な王や皇帝たちが執行した供儀祭に参加していた記述が数多くあります。またこの節には、マハーラージャ・パリークシットが主宰した馬の供儀祭のあいだ、その儀式のおかげで、ふつうの人たちでもほかの惑星から訪れていた半神たちが見られたこともわかります。主を見ることが

できないように、ふつう、半神は一般人には見えません。しかし、主はいわれのない慈悲で、凡人にも見えるように降誕するように、半神たちもかれら自身が慈悲をとおして凡人でも見えるようになります。天界の生命体はこの地球にいる住人の目では見ることはできないのですが、半神たちが姿を自分たちの姿を見せることに同意したのは、マハーラージャ・パリークシットの力にほかなりません。王たちは、そのような儀式をとおして惜しみなく財産を消費したのですが、それはいわば雲が雨を降らせるようなものです。雲は水の別の姿、あるいは言い換えれば、地球の水は雲に変わる、ということです。同じように、そのような儀式をとおしてしめされた寛大さは、市民たちから集められた別の形での税金でもあります。しかし雨が豊富に、また必要以上に降るように見えますが、そのような王たちの寛大な慈善も、市民たちには必要以上のように与えられているように見えます。満足した市民たちは王に反対運動を起こしたりはしませんから、君主国を変える必要はどこにもありませんでした。

マハーラージャ・パリークシットほどの王にでさえ精神指導者の導きが必要でした。その導きがなければ、精神生活を高めることはできません。精神指導者は真実の人物でなくてはなりませんし、自己の悟りを求めている人は、ほんとうの成功を手に入れるためにも、かならず真実の精神指導者に身をゆだねなくてはなりません。

#### 第4節

निजग्राहौजसा वीरः कलिं दिग्विजये क्वचित् ।  
नृपल्त्रिाधरं शूद्रं घ्नन्तं गोमिथुनं पदा ॥ ४ ॥

*nijagrāhaujasā vīraḥ*  
*kalim digvijaye kvacit*  
*nṛpa-liṅga-dharam śūdram*  
*ghnantam go-mithunam padā*

*nijagrāha*—十分に処罰した; *ojasā*—力によって; *vīraḥ*—勇敢な英雄; *kalim*—カリ、この時代の主人に; *digvijaye*—世界征服への道の途中に; *kvacit*—あるとき; *nṛpa-liṅga-dharam*—王の衣服をまとっていた者; *śūdram*—下等な者; *ghnantam*—傷つけている; *go-mithunam*—雌牛と雄牛; *padā*—足に。

あるときマハーラージャ・パリークシットは、世界制覇のために移動していたとき、カリ・ユガの主（ぬし）を見た。シュードラにも劣り、王に変装し、雌牛と雄牛の足を傷つけようと

している。王はすぐさまその男を拘束し、十分な罰を加えようとした。

### 要旨解説

王が世界を制覇するために出立するのは、ただ自分の勢力を拡大させるためではありません。マハーラージャ・パリークシットは王座についたあと世界制覇に出向きましたが、それは他国侵略が目的ではありませんでした。かれは世界の皇帝であり、ほかの小国はすでに体制下に置いていました。出立した目的は、神を敬う国家という観点から世界の趨勢を見届けるためでした。王は主の代表者ですから、主の意志を正しく実現させなくてはなりません。勢力を強化させるつもりなどありませんでした。ですから、王に変装していた下等な男が雌牛と雄牛の足を傷つけていた様を見たマハーラージャ・パリークシットは、すぐにその男を捕らえ、処罰しました。王はもっとも重要な動物である牛が冒瀆されることをけっして許しませんし、またもっとも重要な人間であるブラーフマナへの無礼には耐えられません。人間文化とは、ブラーフマナの文化を基準として高められなくてはならず、その状態を維持するために牛の保護は絶対不可欠です。牛乳は奇跡の食料であり、優れた偉業を実現させる生理学的条件を満たすビタミンをすべて含んでいます。ブラフマンの文化は、人間が有徳の気質を高める教育を受けたときだけでなく高まり、その目的のために牛乳、くだもの、穀物で作られた食料がなによりも必要なのです。マハーラージャ・パリークシットは、この肌の黒いシュードラが支配者の衣服をまとい、社会でもっともたいせつな動物である牛を虐待している様子を見て驚きました。

カリ時代は、誤った管理と口論の時代です。そしてその元凶は、人生の高い大志もなく、下等な様式にいる無価値な人間が、国家管理という指導的な立場に座っていることにあります。王の座にいるそのような人間は牛とブラーフマナ文化をかならず傷つけ、社会全体を地獄に落としいれているのです。マハーラージャ・パリークシットは正しい訓練を受けた人物であり、全世界の争いの根源を直感しました。だからこそ、それを初期段階でそれを食い止めたいと考えたのです。

### 第5節

#### शौनक उवाच

कस्य हेतोर्निजग्राह कलिं दिग्विजये नृपः ।  
नृदेवचिह्नधृक् शूद्रकोऽसौ गां यः पदाहन्त् ।  
तत्कथ्यतां महाभाग यदि कृष्णकथाश्रयम् ॥ ५ ॥

śaunaka uvāca  
kasya hetor nijagrāha  
kalim digvijaye nṛpaḥ  
nṛdeva-cihna-dhṛk śūdra-  
ko 'sau gām yaḥ padāhanat  
tat kathyatām mahā-bhāga  
yadi kṛṣṇa-kathāśrayam

śaunakaḥ uvāca—シャウナカ・リシが言った; kasya—なんのために; hetoḥ—理由; nijagrāha—十分に処罰した; kalim—カリ時代の主(ぬし); digvijaye—世界を旅していた途中; nṛpaḥ—王; nṛ-deva—王族の人物; cihna-dhṛk—~のように着飾って; śūdrakaḥ—シュードラという最下等の者; asau—彼; gām—雌牛; yaḥ—~である者; padā ahanat—足を叩いて; tat—そのすべて; kathyatām—説明してください; mahā-bhāga—非常に幸運な方よ; yadi—もし、しかし; kṛṣṇa—クリシュナについて; kathā-āśrayam—主の話題に関連して。

シャウナカ・リシが尋ねた。「マハーラージャ・パリークシットはなぜ、その男を処罰だけにとどめようとしたのでしょうか。最下等のシュードラで、王のかっこうを真似、牛の足を打っていたような男を。もし、その話題が主クリシュナと結びついているのであれば、そのすべてをお話してください」。

### 要旨解説

シャウナカとリシたちは、敬虔なマハーラージャ・パリークシットが、この犯罪者をただ処罰するだけで、殺さなかったことを聞いて驚いています。これは、マハーラージャ・パリークシットのような敬虔な王ならば、王のように着飾って大衆を騙しつつ、もっとも純粋な動物である牛を冒涇しようとしていた犯罪者をすぐに殺すべきだった、ということを表わしています。しかし当時のリシたちは、カリ時代が進むと、最下等のシュードラが管理者として選ばれ、牛たちを殺す屠殺場を組織的に運営することを想像すらできませんでした。いずれにしても、シュードラカ(śūdraka)という詐欺師、牛の冒涇者のことなど偉大なりシたちにはなんの関心もなかったのですが、それでも、この話題が主クリシュナにかかわっているのであれば聞きたいと思いました。クリシュナの話と合致していることは聞くに値するからこそ、かれらの関心は主クリシュナの話題だけに向けられていたのです。『シュリーマド・バーガヴァタム』には、社会学、政治学、経済学、文化的事業など多くの話題が含まれていますが、そのすべて

がクリシュナと結びついているため、聞くに値します。内容がなんであろうと、クリシュナがすべての話題を純粋にさせる主要素です。俗世界にあるものは、3つの俗な気質によって作られているため、すべて不純です。しかしそれを浄化させる代表者がクリシュナなのです。

## 第6節

अथवास्य पदाम्भोजमकरन्दलिहां सताम् ।  
किमन्यैरसदालापैरायुषो यदसद्वचयः ॥ ६ ॥

*athavāsya padāmbhoja-  
makaranda-lihām satām  
kim anyair asad-ālāpair  
āyūṣo yad asad-vyayaḥ*

*athavā*—そうでなければ; *asya*—かれの（主クリシュナの）; *pada-ambhoja*—蓮華の御足; *makaranda-lihām*—そのような蓮華の花の蜜を嘗める者達の; *satām*—永遠に存在する者達の; *kim anyaiḥ*—ほかの物事にどのような価値があるだろうか; *asad*—幻想の; *ālāpaiḥ*—話題; *āyūṣaḥ*—寿命の; *yat*—～であるものは; *asad-vyayaḥ*—不必要な人生の無駄。

主の献愛者は、主の蓮華の御足からあふれでる蜜をいつも嘗めて味わっている。貴重な人生を無駄にするにすぎない話題に、どんな価値があるうか。

## 要旨解説

主クリシュナとその献愛者たちは、どちらも超越的な境地にいます。ですから、主クリシュナと純粋な献愛者にまつわる話題は同じようにすばらしいのです。クルクシェートラの戦いは政治と外交の世界でしたが、主クリシュナと関係があったからこそ『バガヴァッド・ギーター』は全世界で崇められているのです。俗人にとって俗な話題でしかない政治学、経済学、社会学などを放棄する必要はありません。主と真に結ばれている純粋な献愛者には俗な話題でも、主と、あるいは主の純粋な献愛者と結びついていれば超越的な質に変貌します。これまでパандаヴァ兄弟について聞き、話してきましたが、これからはマハーラージャ・パリークシットの話に移ります。しかし、そのすべてが主シュリー・クリシュナと直結しているからこそ、すべて超越的であり、純粋な献愛者は強い関心で聞こうとします。この要点については、ビーシュマデーヴァの祈りの箇所ですすでに学びました。

私たちの一生は長くありませんし、いつなるとき、すべてを残して立ちさるよう命じられて来世につれていかれるか定かではありません。ですから、生涯のほんの一瞬でさえ、主クリシュナと関係のない話題に巻きこまれて無駄にならないよう注視する義務があります。またどれほど耳に心地よくても、クリシュナと結ばれていない話題は聞く価値はありません。

精神的惑星、そして主クリシュナの永遠の住居ゴーローカ・ヴリンダーヴァナは、蓮華の花の渦に似た形をしています。主は俗世界のどの惑星でさえ、自分の住居をそこにそのまま表わして降誕します。ですから、主の御足はいつもその同じ巨大な蓮華の渦のうえに置かれています。主クリシュナの御足は蓮華の花のように美しく、そのため主は蓮華の御足を持っている、と表現されています。

生命体は本来永遠です。しかし、物質エネルギーと接触しているために誕生と死の渦巻きに縛られています。その物質エネルギーから自由になった生命体は解放され、ふるとに、神のもとに帰っていく資格を授かります。物質の体を変えずにいつまでも生きたいと願う人々は、主クリシュナと献愛者に関連する話題以外のことで貴重な時間を無駄にすべきではありません。

## 第7節

क्षुद्रायुषां नृणाम्। मर्त्यानामृतमिच्छताम् ।  
इहोपहृतो भगवान् मृत्युः शामित्रकर्मणि ॥ ७ ॥

*kṣudrāyuṣāṁ nṛṇām aṅga*  
*martyānām ṛtam icchatām*  
*ihopahūto bhagavān*  
*mṛtyuḥ sāmitra-karmaṇi*

*kṣudra*—非常に小さい; *āyuṣām*—寿命の; *nṛṇām*—人類の; *aṅga*—おおスータ・ゴースヴァーミー; *martyānām*—必ず死に直面する者達の; *ṛtam*—永遠な生活; *icchatām*—それを望む者達の; *iha*—この中で; *upahūtaḥ*—参加するよう呼ばれた; *bhagavān*—主を代表している; *mṛtyuḥ*—死の支配者、ヤマラージャ; *sāmitra*—抑止している; *karmaṇi*—執行。

おお、スータ・ゴースヴァーミー。人間のなかには、死から解放されて永遠な命を求める人々があります。かれらは、死の支配者・ヤマラージャの名を呼ぶことで、その殺戮の過程から逃れるのです。

## 要旨解説

生命体は、下等な動物から高等な人間にまで徐々に高められていくうちに、死の束縛から解放されたいと強く願うようになります。現代科学者は、生理化学の知識の力で死を避けようとしますが、哀れなことに、死の支配者ヤマラージャはひじょうに残酷無残で、その科学者の命さえ容赦なく奪いさってしまいます。科学知識を発達させて死を止める理論を並びたてる科学者自身がヤマラージャに呼ばれ、死の犠牲になるのです。死を止めることはおろか、短い寿命のほんの一瞬さえ延ばすことはできないのです。ヤマラージャの残酷な殺戮の過程を止める唯一の望みは、その名を呼んで、主の聖なる名前を聞いて唱えることしかありません。ヤマラージャは主の偉大な献愛者であり、主への献愛奉仕にいつも没頭している純粋な献愛者が行なうキールタナや儀式に招かれたいと思っています。だからこそシャウナカを筆頭とする偉大な聖者たちや他の人々は、ナイミシャーラニヤで行なわれる供儀祭に参加するようヤマラージャを招いているのです。これは、死にたくないと思っている人々にとってすばらしいことです。

## 第8節

न कश्चिन्म्रियते तावद् यावदास्त इहान्तकः ।  
एतदर्थं हि भगवानाहूतः परमर्षिभिः ।  
अहो नृलोके पीयेत हरिलीलामृतं वचः ॥ ८ ॥

na kaścīn mriyate tāvad  
yāvad āsta ihāntakaḥ  
etat-arthaṁ hi bhagavān  
āhūtaḥ paramarṣibhiḥ  
aho nṛ-loke pīyeta  
hari-līlāmṛtaṁ vacaḥ

na—～ではない; kaścīn—誰でも; mriyate—死ぬだろう; tāvat—非常に長い; yāvat—～である限り; āste—居る; iha—この中に; antakaḥ—生涯を終わらせる者; etat—これ; artham—理由; hi—確かに; bhagavān—主の代表者; āhūtaḥ—招かれた; parama-ṛṣibhiḥ—偉大な聖者達によって; aho—ああ; nṛ-loke—人間社会で; pīyeta—彼らに飲ませよう; hari-līlā—主の超越的な娯楽; amṛtam—永遠な命への甘露; vacaḥ—物語。

すべての生命体に死をもたらすヤマラージャがここにいるかぎり、だれも死にません。偉大な聖者たちは、主の代表者で、死の支配者ヤマラージャを招きました。ヤマラージャの掌中に命を握られている生命体たちは、主の超越的な娯楽という姿の不死の甘露を聞き、この生涯を活用しなくてはなりません。

### 要旨解説

人間ならだれでも死にたいとは思いませんが、その死を止める方法を知りません。死を避けるもっとも確かな方法は、『シュリーマド・バーガヴァタム』の本文のなかに秩序立てて語られている主の甘露に満ちた娯楽についていつも聞く習慣を身につけることにあります。ですからこの節では、死から解放されたいと望むすべての人間は、シャウナカを筆頭とするリシたちが勧めているようにこの生涯を活用しなくてはなりません。

### 第9節

मन्दस्य मन्दप्रज्ञस्य वयो मन्दायुषश्च वै ।  
निद्रया हियते नक्तं दिवा च व्यर्थकर्मभिः ॥ ९ ॥

*mandasya manda-prajñasya  
vayo mandāyusaś ca vai  
nidrayā hriyate naktam  
divā ca vyartha-karmabhiḥ*

*mandasya*—怠惰な者の; *manda*—無価値な; *prajñasya*—知性の; *vayaḥ*—年齢; *manda*—短い; *āyusaḥ*—寿命の; *ca*—そして; *vai*—まさに; *nidrayā*—眠ることで; *hriyate*—過ごしている; *naktam*—夜; *divā*—日中; *ca*—もまた; *vyartha*—無価値なことのために; *karmabhiḥ*—活動によって。

無価値な知性と短い命しかない怠惰な人間たちは、夜は眠ることに、昼はなんの意味もないことにために時間を費やしています。

### 要旨解説

知性のない人は、人間生活が持つほんとうの価値を知りません。人間の姿は、物質自然界が

生命体に苦しみを強いる厳格な法則を強いるなかでの「特別の贈り物」です。誕生と死の繰り返しという束縛から抜けだせるなによりも気高い恩恵なのです。賢い人はその束縛から抜けだすために奮闘し、その大切な贈り物を大事に使います。いっぽう、知性のない人は無気力なため、束縛から解放されるためにある人間の体という贈り物にどれほどの価値があるかわかりません。そんなかれらが関心を抱くのはいわゆる経済発展で、はかない体の感覚を楽しもうと朝から晩まで働くばかり。感覚の楽しみは、自然界の定めによって下等な動物でも味わえるものですから、人間でも、過去、あるいはいましていることに応じてある程度の感覚は楽しむに決まっているのです。しかし、そのような感覚の楽しみが人間生活の窮極目標ではないことは、きっぱりと理解しなくてはなりません。この節では、昼間、人は「なんにもならないこと」のために働いている、と言われていますが、それは目的が感覚の楽しみだけに向けられているからです。人間が、なんにもならないことのために大都市や工業都市で働いている様子をまのあたりにすることができます。人間のエネルギーで膨大な産物が作られましたが、どれも感覚を楽しむために為されたもので、束縛から抜けだすためではありません。昼間いっしょけんめいに働いたあと、疲れ切ったら夜は眠るか、あるいはセックスを楽しみます。それが、知性に欠ける人々に用意された物質主義的文化の計画です。その理由で、かれらはこの節で、怠惰で短命、と表現されているのです。

## 第10節

सूत उवाच

यदा परीक्षित् कुरुज्ज्वालेश्वसत्  
 कलिं प्रविष्टं निजचक्रवर्तिते ।  
 निशम्य वार्तामनतिप्रियां ततः  
 शरासनं संयुगशौण्डिराददे ॥ १० ॥

*sūta uvāca*

*yadā parikṣit kuru-jāṅgale 'vasat  
 kalim praviṣṭam nija-cakravartite  
 niśamya vārtām anati-priyām tataḥ  
 śarāsanam saṁyuga-śauṇḍir ādade*

*sūtaḥ uvāca*—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *yadā*—～の時; *parikṣit*—マハーラージャ・パリークシット; *kuru-jāṅgale*—クル王国の首都で; *avasat*—住んでいた; *kalim*—カリ時代の兆

し; *praviṣṭam*—入った; *nija-cakravartite*—彼の管轄内で; *niśamya*—このように聞いている; *vārtām*—知らせ; *anati-priyām*—あまり心地よいものではない; *tataḥ*—その後; *śarāsanam*—矢と弓; *saṃyuga*—～の機会を得た; *śauṇḍih*—戦闘の活動; *ādade*—取りあげた。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「マハーラージャ・パリークシットがクル王国の首都に住んでいたとき、直轄していた国内にカリ時代の兆しが入りこんだ。パリークシット王はその異常を察知し、快く思わなかった。しかしそれが、王に戦う機会を与えたのである。そして弓と矢を手に、戦いの準備に入った」

### 要旨解説

マハーラージャ・パリークシットの国家管理体制は完璧で、かれ自身は首都で心穏やかに住んでいました。しかしそのとき、カリ時代の兆しが入りこんでいる知らせを受けます。そしてこの知らせを不快に思いました。カリ時代の兆しとは？ それは(1) 女性との不義の関係、(2) 肉食にふけること、(3) 陶酔物、(4) 賭博を楽しむことです。カリ時代とは文字通りには「争いの時代」で、上記の4つの兆しが入りこんでいるのが人間社会での争いすべての根源です。マハーラージャ・パリークシットは一部の市民がすでにこれらにかかわっていることを聞き、不安を作りだすこの要因をすぐに一掃したいと考えました。これはつまり、少なくともマハーラージャ・パリークシットの政権までは、このような兆しは市民生活のなかにほとんど見られなかったということですが、その兆しが入りこんで現われた時点で、根こそぎにしたいと考えました。その知らせはかれにとって不快なものではありましたが、戦う機会を与えたのですから、ある意味では好機でもあります。パリークシット王に従属することでだれもが平和に暮らしていたのですから、小国相手に戦う必要はどこにもなかったのですが、カリ・ユガの悪人たちの存在が、かれをして闘魂を奮い立たせる機会を与えたのです。完璧なクシャトリアは、戦い機会を得るといつでも喜びます。いわば、スポーツマンが競技に参加することを待ち望んでいるようなものです。カリ時代の忌まわしい兆しが入りこんでいたことに反論する余地はありません。予言されていないのであれば、その兆しに戦って勝つ準備をする必要はないはずですが。そのような反論は、怠惰で不運な人たちがよくするものです。雨期になれば雨が降ることは予想され、人々は警戒して身を守ろうとします。同じように、カリ時代には上述された兆しはまちがいでなく世に入りこんでくるのですから、市民がカリ時代の手先たちとかわることから救うのは国の義務です。マハーラージャ・パリークシットはカリの兆候に溺れている悪人たちを処罰したいと考え、そうすることで、宗教文化に従って純粋な習慣を維持していた罪のない市民たちを救いたいと考えました。そのように保護するのが王の義務であり、マハーラージャ・パ

リークシットが戦う準備をしたのは正しい選択でした。

### 第 1 1 節

स्वलङ्कृतं श्यामतुररायोजितं  
रथं मृगेन्द्रध्वजमाश्रितः पुरात् ।  
वृत्तो रथाश्चद्विपपत्तियुक्तया  
स्वसेनया दिग्विजयाय निर्गतः ॥ ११ ॥

*svalaṅkṛtaṁ śyāma-turaṅga-yojitaṁ  
rathaṁ mṛgendra-dhvajam āśritaḥ purāt  
vṛto rathāśva-dvipa-patti-yuktayā  
sva-senayā digvijayāya nirgataḥ*

*su-alāṅkṛtam*—十分に飾られて; *śyāma*—黒い; *turaṅga*—馬; *yojitam*—取り組んだ; *ratham*—馬車; *mṛga-indra*—ライオン; *dhvajam*—旗で飾られて; *āśritaḥ*—保護下で; *purāt*—首都から; *vṛtaḥ*—～に囲まれて; *ratha*—二輪戦車; *aśva*—騎兵隊; *dvipapatti*—象; *yuktayā*—そのように装備して; *sva-senayā*—歩兵隊と共に; *digvijayāya*—征服する目的で; *nirgataḥ*—出ていった。

マハーラージャ・パリークシットは、黒い馬に引かれた馬車に座った。馬車の旗には獅子が刻印されている。そのように飾られ、二輪戦車、騎兵隊、象、歩兵隊に囲まれた王は、四方をくまなく征服するために都を出立した。

### 要旨解説

マハーラージャ・プリトゥと祖父のアルジュナとの違いがここにあります。白馬ではなく黒馬がかれの馬車を引いていたのです。そして馬車の旗には獅子が刻印されていますが、祖父の馬車にはハヌマーンジーが印されていました。マハーラージャ・パリークシットのような国王の行進は、美しく飾られた馬車、騎兵隊、歩兵隊、楽団など、目に心地よい見栄えだけでなく、最前線においても美的感覚を彷彿とさせる文化の印でもあります。

### 第 1 2 節

भद्राश्वं केतुमालं च भारतं चोत्तरान् कुरुन् ।  
किम्पुरुषादीनि वर्षाणि विजित्य जगृहे बलिम् ॥ १२ ॥

*bhadrāśvam ketumālam ca*  
*bhāratam cottarān kurūn*  
*kimpuruṣādīni varṣāṇi*  
*vijitya jagrhe balim*

*bhadrāśvam*—バドウラーシュヴァ; *ketumālam*—ケートウマーラ; *ca*—もまた; *bhāratam*—バーラタ; *ca*—そして; *uttarān*—北部の国々; *kurūn*—クル家の王国; *kimpuruṣa-ādīni*—ヒマラヤ北部を超えた地域; *varṣāṇi*—地球の各地域; *vijitya*—征服している; *jagrhe*—徴収した; *balim*—力。

そしてマハーラージャ・パリークシットは、バドウラーシュヴァ、ケートウマーラ、バーラタ、クル北部、キンプルシャなど、地球全土を掌握し、各地域の支配者から貢ぎ物を徴収した。

### 要旨解説

バドウラーシュヴァ メール・パルヴァタ付近一帯にあり、ガンダ・マーダナ・パルヴァタから塩の海まで広がっています。このヴァルシャの説明は『マハーバーラタ』（ビーシュマ・パルヴァ 第7章・第14-18節）にあり、サンジャヤからドゥリタラーシュトラに説明されています。

マハーラージャ・ユディシュティラもこのヴァルシャ・部分を制圧しており、かれの王国の管轄に含まれています。マハーラージャ・パリークシットが祖父から受け継いだ国土すべての皇帝であることはすでに宣言されているのですが、なおかつ、その国々から貢ぎ物を受けとるために諸外国に赴いたとき、みずからの主権を確立させる必要がありました。

ケートウマーラ 地球は7つの海によって7つのドウヴィーパに分割され、中央のドウヴィーパをジャンブードウヴィーパといい、それが8つの巨大な山によって9つのヴァルシャに分けられています。バーラタ・ヴァルシャは、上記の9つのヴァルシャの一つで、ケートウマーラもそのヴァルシャの一つとして述べられています。ケートウマーラのヴァルシャに住む女性たちはひじょうに美しい、とも説明されています。このヴァルシャはアルジュナによって制圧されており、『マハーバーラタ』（サバー 第28章・第6節）でこの地域について知ることができます。

この地域はメール・パルヴァタの西部に位置しており、その住人たちは1万年生きていた、と述べられています（『マハーバーラタ』ビーシュマ・パルヴァ 第6章・第31節）。この地域の住民は金色の肌をし、女性たちは天国の天使によく似ています。またいっさいの病気や悲しみに苦しめられることがありませんでした。

バーラタ・ヴァルシャ この地域はジャンブードウヴィーパの9つのヴァルシャの一つです。バーラタ・ヴァルシャについては『マハーバーラタ』（ビーシュマ・パルヴァ 第9章・第10節）で説明されています。

ジャンブードウヴィーパの中心がイラーヴリタ・ヴリシャで、イラーヴリタ・ヴァルシャの南側にハリ・ヴァルシャがあります。これらのヴァルシャについては『マハーバーラタ』（サバー・パルヴァ 第28章・第7－8節）で次のように説明されています。

*nagarāmś ca vanāmś caiva  
nadiś ca vimalodakāḥ  
puruṣān deva-kalpāmś ca  
nārīś ca priya-darśanāḥ  
  
adṛṣṭa-pūrvān subhagān  
sa dadarśa dhanañjayaḥ  
sadanāni ca śubhrāṇi  
nārīś cāpsarasām nibhāḥ*

この節では、どちらのヴァルシャの女性には美女が多く、一部の女性は天界の女性・アプサラにも匹敵する、とされています。

ウッタラクル ヴェーダの地理学によると、ジャンブードウヴィーパの北部をウッタラクル・ヴァルシャと呼びます。3方向を海に囲まれヒランマヤ・ヴァルシャ側にあるシュリングヴァーン山によって3区分に分けられています。

キンプルシャ・ヴァルシャ ここはヒマラヤ山脈の北に位置し、長さとは高さは8万平方マイル、広さ1万6,000マイルに及ぶ地域です。この地域もアルジュナによって制圧されました（『マハーバーラタ』 サバー 第28章・第1－2節）。キンプルシャの住民はダクシャの娘の子孫です。マハーラージャ・ユディシュティラが馬の供儀ヤギヤを執行したとき、これらの国々の住民たちもその祭りに加わり、皇帝に貢ぎ物をしました。この地域はキンプルシャ・ヴァルシャ、またときにはヒマラヤ地域（ヒマヴァティー）と呼ばれることがあります。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはここヒマラヤ地区で生まれ、ヒマラヤの国々を通過したあとバーラタ・ヴァルシャに来た、とされています。

言いかえれば、マハーラージャ・パリークシットは全世界を制覇し、また四方の海に隣接する大陸、すなわち世界の東西南北全土をすべて平定していたということです。

第 13 – 15 節

तत्र तत्रोपशृण्वानः स्वपूर्वेषां महात्मनाम् ।  
प्रगीयमाणं च यशः कृष्णमाहात्म्यसूचकम् ॥ १३ ॥  
आत्मानं च परित्रातमश्वत्थाम्नोऽस्रतेजसः ।  
स्नेहं च वृष्णिपार्थानां तेषां भक्तिं च केशवे ॥ १४ ॥  
तेभ्यः परमसन्तुष्टः प्रीत्युञ्जुम्भितलोचनः ।  
महाधनानि वासांसि ददौ हारान् महामनाः ॥ १५ ॥

*tatra tatropaśṛṇvānaḥ*  
*sva-pūrveṣāṃ mahātmanām*  
*pragīyamāṇam ca yaśaḥ*  
*kṛṣṇa-māhātmya-sūcakam*

*ātmānam ca paritrātam*  
*aśvatthāmno 'stra-tejasah*  
*sneham ca vṛṣṇi-pārthānām*  
*teṣām bhaktim ca keśave*

*tebhyaḥ parama-santuṣṭaḥ*  
*prīty-ujjṛmbhita-locanaḥ*  
*mahā-dhanāni vāsānsi*  
*dadau hārān mahā-manāḥ*

*tatra tatra*—王が訪ねる場所すべてで; *upaśṛṇvānaḥ*—絶えず彼は聞いた; *sva-pūrveṣām*—自分の先祖達について; *mahā-ātmanām*—全員が主の偉大な献愛者たち; *pragīyamāṇam*—どのように語りかけている者達に; *ca*—もまた; *yaśaḥ*—栄光; *kṛṣṇa*—主クリシュナ; *māhātmya*—栄光に満ちた行為; *sūcakam*—示している; *ātmānam*—彼、個人自身; *ca*—もまた; *paritrātam*—救った; *aśvatthāmnaḥ*—アシュヴァッターマーの; *astra*—武器; *tejasah*—強力な光線; *sneham*—愛着; *ca*—もまた; *vṛṣṇi-pārthānām*—ヴリシュニとプリターの子孫の間; *teṣām*—彼ら全員の; *bhaktim*—献愛の心; *ca*—もまた; *keśave*—主クリシュナに; *tebhyaḥ*—彼らに; *parama*—極度に; *santuṣṭaḥ*—宇喜んで; *prīti*—魅了; *ujjṛmbhita*—公に喜んで; *locanaḥ*—そのような目を持つ者; *mahā-dhanāni*—価値ある富; *vāsānsi*—衣服; *dadau*—慈善として与えた; *hārān*—首飾り; *mahā-manāḥ*—広い視野を持つ者。

王がどこを訪ねても、主の偉大な献愛者である高潔な先祖たちの栄光を、そして主クリシュナの栄光に満ちた活動について幾度となく聞いた。またかれ自身が主によって、アシュヴァッターマーが放った武器の強烈な熱から守られたことも聞いた。さらに人々は、ヴリシュニとプリターの子孫たちが交わす強い愛着について口々に語っていた。プリターが主ケーシャヴァに深い愛情を注いでいたからである。王は、そのような栄光を詠う吟唱家たちを心から嬉しく思い、大そう満足して目を輝かせた。そして寛大な心から、喜んでかれらに高価なネックレスや衣服を与えた。

### 要旨解説

国王や偉人は歓迎の言葉とともに迎えられます。この慣習は昔から続けられ、マハーラージャ・パリークシットも、世界にその名を響かせていた皇帝の一人でしたから、どこを訪ねても歓迎の言葉で迎えられました。歓迎の言葉の内容にはクリシュナのことが含まれています。クリシュナ、たとえば、その言葉はクリシュナもその永遠の献愛者をも指しており、そして王には王もその親密な交流者も含まれます。

クリシュナとクリシュナの純粋な献愛者は決して離れられませんから、献愛者を讃えるのは、逆にクリシュナを讃えているのと同じことです。マハーラージャ・パリークシットは、マハーラージャ・ユディシュティラやアルジュナという先祖たちの栄光が主クリシュナの活動と関係していなければ、聞いてもとくに喜びはしなかったはずで、主は、とくに献愛者たちを救うために降誕します（『バガヴァッド・ギーター』第4章・第8節）。献愛者は主の存在をとおして讃えられるものです。かれらは、主の存在と主のさまざまなエネルギーと離れては一瞬たりとも生きられないからです。主は、主自身の行為と栄光をとおして献愛者のために存在していますから、マハーラージャ・パリークシットは、主がそのような行動によって、とくに自分が母親の胎内で主によって救われたときのように、讃えられるときに主の存在を感じました。主の献愛者は決して危険な目にあいませんが、毎瞬間危険が潜む物質界にいるとき、危険な状態に陥るように見えるだけであり、そしてかれらが主によって救われると、主が讃えられます。もしもパーンダヴァ兄弟のような主の献愛者たちがクルクシェートラの戦場で窮地に陥らなければ、主クリシュナは『バガヴァッド・ギーター』の語り手として讃えられなかったでしょう。主のそのような行動すべてが歓迎の言葉で紹介され、マハーラージャ・パリークシットはその話に心から満足し、語った人々に報酬を与えました。現代と当時の歓迎の言葉で違っているのは、かつてはマハーラージャ・パリークシットのような人物に対して歓迎の言葉が向けられていたという点にあります。その歓迎の言葉は正確無比な描写で語られ、語った人々は充分な報

酬を授かりますが、現代ではいつも本当のことが語られているわけではなく、それなりの地位に就いている凡人を喜ばせることが多く、その中身もご機嫌取りの嘘八百だったりします。そして、その歓迎の言葉を口にする人たちも、言葉を受けとった凡人から報酬を受けとることはほとんどありません。

## 第 16 節

सारथ्यपारषदसेवनसख्यदौत्य-  
वीरासनानुगमनस्तवनप्रणामान् ।  
स्निग्धेषु पाण्डुषु जगत्प्रणतिं चविष्णो-  
र्भक्तिं करोति नृपतिश्चरणारविन्दे ॥ १६ ॥

*sārathya-pāraṣada-sevana-sakhya-dautya-  
virāsanānugamana-stavana-praṇāmān  
snigdheṣu pāṇḍuṣu jagat-praṇatim ca viṣṇor  
bhaktim karoti nṛ-patiś caraṇāravinde*

*sārathya*—御者の身分を受けいれ; *pāraṣada*—ラージャスーヤ供儀祭の集まりで代表者になることの受けいれ; *sevana*—主への奉仕に絶えず心を使っている; *sakhya*—主を友人として考えること; *dautya*—使者の身分の受けいれ; *vira-āsana*—夜、剣を抜いて警戒する立場を受けいれること; *anugamana*—その足跡に従っている; *stavana*—祈りを捧げている; *praṇāmān*—お辞儀をしている; *snigdheṣu*—主の意志に柔軟な者達に; *pāṇḍuṣu*—パードウの息子達に; *jagat*—普遍的な者; *praṇatim*—服従する者; *ca*—そして; *viṣṇoḥ*—ヴィシュヌの; *bhaktim*—献愛の心; *karoti*—～する; *nṛ-patiḥ*—王; *caraṇa-aravinde*—主の蓮華の御足に。

マハーラージャ・パリークシットは、だれもが服従する主クリシュナ（ヴィシュヌ）が、みずからのいわれのない慈悲心から、パードウの従順な息子たちのために御者、代表者、使者、友人、夜警など、どのようなことをしても仕えていたことを聞いた。パードウ兄弟の意志に沿えるよう、あたかも召使いのように従い、年下のようにお辞儀をしていたのである。この話を聞いたマハーラージャ・パリークシットは、主の蓮華の御足への強い愛着に包まれた。

## 要旨解説

主クリシュナは、パードウ兄弟のような純粹無垢な献愛者にとってはすべてです。かれ

らにとって主は至高主であり、精神指導者であり、崇拝する神像、案内者、御者、友人、召使い、使者、あるいは思いうかべられるものすべてです。そして、主もパーンダヴァ兄弟の気持ちに応えます。マハーラージャ・パリークシットは、純粋な献愛者として、主が献愛者と超越的な気持ちの交換をしていることを深く理解し、主のそのようなふるまいに胸を打たれたのでした。主が純粋な献愛者にどのように対応するかをただ評価するだけで、私たちは解放されません。主の献愛者とのふれあいは、ふつうの人間同士の交流に見えますが、その真相を見ることのできる人は、すぐにふるさとへ、神のもとへ帰る資格をそなえることができます。パーンダヴァ兄弟は主の意志に完璧に従順であり、主に仕えるためならどのようなことでも犠牲にすることができ、そしてそのような無垢な決意をとおして、望みどおりに主の慈悲を確実に授かることができます。

### 第 17 節

तस्यैवं वर्तमानस्य पूर्वेषां वृत्तिमन्वहम् ।  
नातिदूरे किलाश्चर्यं यदासीत् तन्निबोध मे ॥ १७ ॥

*tasyaivaṃ vartamānasya  
pūrveṣāṃ vṛttim anvaham  
nātidūre kilāścaryam  
yad āsīt tan nibodha me*

*tasya*—マハーラージャ・パリークシットの; *evam*—このように; *vartamānasya*—そのような思いに没頭しつづけて; *pūrveṣāṃ*—彼の先祖の; *vṛttim*—優れた職務; *anvaham*—日ごとに; *na*—～ではない; *ati-dūre*—遠い昔の; *kila*—確かに; *āścaryam*—驚くべき; *yad*—それ; *āsīt*—～だった; *tat*—～であるもの; *nibodha*—それを知っている; *me*—私から。

ではこれから、マハーラージャ・パリークシットが自分の先祖たちの優れた職務について聞き、かれらに思いをはせて過ごしていたときに、なにが起こったか、聞いていただきたい。

### 第 18 節

धर्मः पदैकेन चरन् विच्छायामुपलभ्य गाम् ।  
पृच्छति स्माश्रुवदनां विवत्सामिव मातरम् ॥ १८ ॥

*dharmah padaikena caran  
vicchāyām upalabhya gām  
pṛcchati smāśru-vadanām  
vivatsām iva mātaram*

*dharmah*—宗教原則の権化; *padā*—足; *ekena*—1本だけで; *caran*—徘徊している; *vicchāyām*—悲しみの影に襲われて; *upalabhya*—出逢って; *gām*—その雌牛; *pṛcchati*—尋ねている; *sma*—～と共に; *aśru-vadanām*—顔に涙を流して; *vivatsām*—我が子を失った者; *iva*—～のように; *mātaram*—母親。

宗教原則の権化、ダルマ (Dharma) は雄牛の姿となって徘徊していた。やがて、雌牛の姿になっている地球の権化に出逢った。雌牛は子を失った母親のように嘆き悲しんでいる。目に涙を浮かべ、その体からは美しさが消えうせている。この様を見たダルマは次のように地球に尋ねた。

#### 要旨解説

雄牛は道義の象徴であり、雌牛は地球の権化です。雄牛と雌牛が喜々としていれば、世界の人々も喜びを感じている、ということです。なぜなら、雄牛は農業をとおして穀物の生産を助け、雌牛はあらゆる食料のなかでもっとも優れた価値をそなえた奇跡の食料・牛乳を生みだしてくれるからです。ならば、人間社会はこの2種類の重要な動物を注意深く育てなくてはなりません。それができれば、かれらが生き生きとしてどこでも自由に歩くことができるからです。しかしかり時代となったいま、雄牛も雌牛も殺され、ブラーフマナ文化についてなにも知らない人間たちに食べられています。雄牛と雌牛は、すべての文化的物事の最高完成であるブラーフマナ文化を広めることで、人間社会全体の正義のために守らなくてはなりません。そのような文化を高めることで社会の道徳は保たれ、その結果、とってつけたような努力をすることなく平和と繁栄を達成できます。ブラーフマナ文化が衰退すれば、雌牛も雄牛もむごい仕打ちを受け、その結果は次の節のような兆候となって現われます。

#### 第19節

*धर्म उवाच  
कच्चिद्वेऽनामयमात्मनस्ते  
विच्छयासि म्नायतेषन्मुखेन ।*

आलक्षये भवतीमन्तराधिं  
दूरे बन्धुं शोचसि कञ्चनाम्ब ॥ १९ ॥

*dharmā uvāca*  
*kaccid bhadre 'nāmayam ātmanas te*  
*vicchāyāsi mlāyateṣan mukhena*  
*ālakṣaye bhavatīm antar-ādhiṁ*  
*dūre bandhum śocasi kañcanāmba*

*dharmā uvāca*—ダルマが尋ねた; *kaccit*—〜かどうか; *bhadre*—淑女; *anāmayam*—非常に元気で喜んでいる; *ātmanas*—自己; *te*—あなたに; *vicchāyāsi*—悲しみの影に包まれているように見える; *mlāyatā*—暗くするもの; *iṣat*—わずかに; *mukhena*—顔によって; *ālakṣaye*—あなたは〜に見える; *bhavatīm*—あなた自身に; *antarādhiṁ*—内なる病氣; *dūre*—長距離; *bandhum*—友人; *śocasi*—〜のことを考えている; *kañcana*—誰か; *amba*—母よ。

(雄牛という姿の)ダルマが尋ねる。「淑女よ。あなたの表情には活力も喜びも見いだすことができません。どうして、そのような暗い悲しみ影に包まれているのでしょうか。その顔を見ると、あなたは暗闇の世界に落ちてしまったように見えます。なにかの病で苦しんでいるのでしょうか、あるいは遠いところに行ってしまった親族のことで思い悩んでいるのでしょうか」

### 要旨解説

カリという現代に生きる人々はいつも不安で満ちています。だれもがいつもなにかの病に苦しめられています。現代人の顔を見ると、かれらの心の表情を察することができます。そしてだれもが、家から遠く離れ、自分のそばにいない親族のことを思いつづけています。カリ時代特有の兆候として、家族が共に暮らす幸せに恵まれてない、という点が挙げられます。生計をたてるために、父親は子どもや妻から、あるいは妻が夫から遠く離れて住んでいる。内臓疾患の苦しみ、身近で愛しい者との別れの苦しみ、生活を維持するための不安など——これらが、現代人を不幸に落としつけている重要な要素です。

### 第20節

पादैर्न्यूनं शोचसि मैकपाद-  
मात्मानं वा वृषलैर्भोक्ष्यमाणम् ।

आहो सुरादीन् हृतयज्ञभागान्  
प्रजा उत स्विन्मघवत्यवर्षति ॥ २० ॥

*pādair nyūnam śocasi maika-pādam  
ātmānam vā vṛṣalair bhokṣyamāṇam  
āho surādīn hr̥ta-yajña-bhāgān  
prajā uta svin maghavaty avarṣati*

*pādaiḥ*—3本の足で; *nyūnam*—減少して; *śocasi*—そのためにあなたは嘆いているのか; *mā*—私の; *eka-pādam*—1本の足だけで; *ātmānam*—自分の体; *vā*—あるいは; *vṛṣalaiḥ*—肉を食べる無法の者達によって; *bhokṣyamāṇam*—搾取れて; *āhoḥ*—儀式で; *sura-ādīn*—権威ある半神達; *hr̥ta-yajña*—儀式の供物がなく; *bhāgān*—共有する; *prajāḥ*—生命体達; *uta*—増えている; *svit*—〜かどうか; *maghavati*—飢饉と不足で; *avarṣati*—雨が降らないために。

私は3本の足を失い、いま1本の足だけで立っています。あなたは、このような私のありさまを嘆いておられるのでしょうか。それとも、肉を食べる不逞の輩たちがあなたを食いものにすることに不安を感じておられるのでしょうか。あるいは、いまでは儀式が行なわれなくなったことで、半神たちが儀式の供物を共有できなくなった窮状を嘆いておられるのでしょうか。それとも、飢饉や干ばつのために人間たちが苦しんでいる様を悲しんでおられるのでしょうか。

### 要旨解説

カリ時代が進むにつれ、とくに4つのこと、つまり寿命、慈悲心、記憶力、道徳あるいは宗教原則がしだいにすたれていきます。ダルマ・宗教原則は、4つのなかの3つの部分として失われ、その象徴である雄牛はいま1本足だけで立っています。全世界の人口の3分の1が無宗教になると、動物にとって世界は地獄にさま変わりします。カリ時代では、神を信じない文化が、直接あるいは間接的に神を否定しているいわゆる宗教的社会を無数に作りだしていくことでしょう。その結果、信仰を忘れた人間社会は、健全な人々が住めない世界を作っていきます。人間は最高人格主神に対する信念にもとづいていくつかの段階に分けられます。一流の信念をもつ人々をヴァイシュナヴァ、あるいはブラーフマナといい、次にクシャトリア、ヴァイシャ、シュードラ、次にムレーツチャ、ヤヴァナ、そして最後にチャンダーラと分類されます。人間の本能の墮落はムレーツチャから始まり、そしてチャンダーラ階級はもっとも墮落した人間とされます。ヴェーダ経典が述べるこれらの段階は、ある特定の社会や誕生で決まるのではなく

ません。一般大衆のさまざまな質に応じて決定されるのです。生得権とか特定の共同社会とはまったく関係ありません。それぞれの質は自分の努力で得ることが出来ますから、ヴァイシュナヴァの息子がムレーッチャになることもあれば、チャンダーラの子がブラーフマナを凌ぐ質をそなえることもあります。それは、至高主とのつながりや親交にもとづいて決まります。

肉食をする人々は一般的にムレーッチャと呼ばれます。いっぽう、肉を食べる人がすべてムレーッチャというわけではありません。経典の教えに従って肉を食べる人はムレーッチャではなく、無節操に肉を食べる人がムレーッチャです。牛肉を食べることは経典で禁止されており、雄牛や雌牛は、ヴェーダの従者によって特別に守られています。しかしカリという現代になると、人々は好き勝手に雄牛や雌牛の体を食いものにするようになり、その結果としてかれら自身がさまざまな苦しみを呼び寄せています。

現代人は儀式をしません。儀式は、感覚を楽しみつつ物質生活を求める人に不可欠なのですが、ムレーッチャは儀式をするつもりはまったくありません。『バガヴァッド・ギーター』（第3章・第14-16節）でも儀式の執行は強く勧められています。

生命体は創造者ブラフマーによって作られ、かれらが神のもとに帰る道を歩いていけるように、儀式を執行する規則もブラフマーが用意しました。それは、生命体は穀物と野菜で生きること、その食糧を食べて血液や精液という形で身体の活力を手に入れ、さらに生物はその血液と精液から別の生物を作り出すことができる、という過程です。しかし、穀物や葉などは雨が降ってこそ生産されるのであり、その雨は勧められた儀式の執行によって正しく地上に降りそそがれます。そのような儀式は、サーマ、ヤジュル、リグ、アタルヴァといったヴェーダの供儀によって定められています。『マヌ・スムリティ』では、火の祭壇をとおして儀式を捧げることで太陽神を喜ばせることができる、と勧められています。喜びを感じた太陽神は海から水を正しく拾いあげ、十分な雲が上空に集められ、そして雨が降りだします。十分な雨が降ったあと、人間や動物たちにとって十分な穀物が作られ、こうして生命体のなかに生きていくためのエネルギーが作られます。しかしムレーッチャは、雄牛や雌牛やほかの動物たちを殺す屠殺場を作ろうとし、工場をどんどん増やしていけば豊かになれると考え、儀式執行や穀物生産を無視して動物という食糧で生きていこうとします。しかしかれらが知るべきことは、動物のためにでさえ葉や野菜を作る必要があるということであり、作らなければ動物は生きていけません。そして、動物のために葉を作るには十分な雨が必要です。ですから、結局はかれらも、太陽神、インドラ、チャンドラといった半神たちの慈悲にすがらなくてはならないし、儀式をして半神たちを満足させなくてはなりません。

なんども説明してきたように、この物質界はいわば刑務所です。半神は主の召使いであり、

この刑務所をきちんと維持する任務をおびています。半神たちは、信仰を無視して生きようとする反抗的な生命体が、しだいに主の至上の力に顔を向けてくれることを望んでいます。だからこそ、儀式を捧げる手順が経典のなかで勧められているのです。

物質主義者は仕事に明け暮れ、感覚満足のために活動の結果を楽しみたいと思っています。こうしてかれらは、毎瞬間罪を犯しつつながら生きています。しかし、主への献愛奉仕に真剣に励んでいる人々は罪や徳を超越しています。かれらの行為は、物質自然界の三様式という穢れから離れているのです。献愛者は定められた儀式をする必要はありません。なぜなら、献愛者の生活そのものが儀式の象徴と言えるからです。いっぽう、感覚を楽しむために果報的活動に励んでいる人々は、定められた儀式をしなくてはなりません。それが、果報的活動者が犯す罪の反動すべてから解放されるただ一つの方法だからです。儀式は、蓄積されたそのような罪を中和させる方法なのです。半神は、そのような儀式が執行されると喜びます——刑務所の看守が、収容されている囚人が従順な人間に変わることに満足するように。しかし主チャイタンニャは、だれでも参加できるヤギャ・儀式、すなわちサンキールタナ・ヤギャというハレー・クリシュナの唱名だけを勧めています。サンキールタン・ヤギャの執行によって、献愛者も果報的活動者も同じ恩恵を授かることができます。

## 第 2 1 節

अरक्ष्यमाणाः स्त्रिय उर्वि बालान्  
शोचस्यथो पुरुषादैरिवार्तान् ।  
वाचं देवीं ब्रह्मकुले कुकर्म्म-  
ण्यब्रह्मण्ये राजकुले कुलाग्र्यान् ॥ २१ ॥

*araksyamāṇāḥ striya urvi bālān*  
*śocasy atho puruṣādair ivārtān*  
*vācaṁ devīm brahma-kule kukarmaṇy*  
*abrahmaṇye rāja-kule kulāgryān*

*araksyamāṇāḥ*—守られていない; *striyaḥ*—女性; *urvi*—地上で; *bālān*—子ども達; *śocasi*—あなたは同情心を感じている; *atho*—そのために; *puruṣa-ādaiḥ*—ラクシャサ達によって; *iva*—そのように; *ārtān*—不幸な者達; *vācam*—語彙; *devīm*—その女神; *brahma-kule*—ブラーフマナ達の家族の中に; *kukarmaṇi*—宗教原則に反した行為; *abrahmaṇye*—ブラーフマナ文化に反する者達; *rāja-kule*—管理者家族の中で; *kula-agryān*—その家族 (ブラーフマナ) すべての中のほとんど。

あなたは、不徳な者たちのために苦境に取り残された女性や子どもたちのことで良心がとがめられているのでしょうか。あるいは、学問の女神が宗教原則に反することにふけっているブラーフマナたちにもてあそばれているからつらい思いをしているのでしょうか。それとも、ブラーフマナたちが、ブラーフマナ文化を尊ばない管理階級の家族に頼っていることを残念に思っているのでしょうか。

### 要旨解説

カリ時代では、女性と子どもは、ブラーフマナと雌牛たちのようにまったくないがしろにされ、守られていません。この時代では、女性が不義の関係に巻き込まれることで多くの女性や子どもたちが守られない状態になります。その結果、女性は男性に守られることを避けるようになり、結婚は男女がふたりで住むことに同意する形式的な形だけで行なわれるようになります。ほとんどの子どもたちが、正しく育てられなくなります。ブラーフマナにしても、本来知性あふれる人々であり、現代教育を最高段階に引きあげることはできるのですが、こと道徳や宗教原則に関するかぎり、もっとも墮落した状態にいます。教育と邪悪な性格は共存せず、両立することはありません。管理階級のトップにいる政治家たちはヴェーダ知識を非難し、いわゆる宗教にかかわらない国を作ろうとし、高い教育を受けたはずのブラーフマナたちが、そのような無節操な政治家たちに雇われます。哲学者でも、宗教原則について何冊も本を作った作家たちも、シャーストラの道徳律に反する政府高官の地位についたりします。ブラーフマナたちは、本来そのような職務にはつかない立場にいたってはなりません。しかしまでは、それをあたりまえのように引き受けるばかりか、もっとも卑俗なことにでもかかわろうとします。これらがカリ時代に見られるいくつかの兆候であり、社会全体の福利には有害なものでしかありません。

### 第 2 2 節

किं क्षत्रबन्धून् कलिनोपमृष्टान्  
राष्ट्रानि वा तैरवरोपितानि ।  
इतस्ततो वाशनपानवासः-  
स्नानव्यवायोन्मुखजीवलोकम् ॥ २२ ॥

*kiṁ kṣatra-bandhūn kalinopasṛṣṭān  
rāṣṭrāṇi vā tairavaropitāni*

*itas tato vāśana-pāna-vāsaḥ-  
snāna-vyavāyona-mukha-jīva-lokam*

*kim*—～かどうか; *kṣatra-bandhūn*—無価値な政治家達; *kalinā*—カリ時代の影響によって; *upasṛṣṭān*—混乱して; *rāṣṭrāṇi*—国政; *vā*—あるいは; *taiḥ*—彼らによって; *avaropitāni*—混乱させている; *itaḥ*—ここ; *tataḥ*—かしこ; *vā*—あるいは; *aśana*—食べ物を食べている; *pāna*—飲む; *vāsaḥ*—住まい; *snāna*—沐浴; *vyavāya*—性交渉; *unmukha*—～を望む; *jīva-lokam*—人間社会。

名ばかりの政治家たちはカリ時代の力に惑わされ、国政を混乱状態に落としきれれています。あなたはこのような混沌とした状態を悲しんでいるのですか。いまでは一般大衆は、食べたり、眠ったり、飲んだり、夫婦になる決まりには従わなくなり、どこでも無制限にそのような生活にふけています。あなたはこの有様を嘆いているのでしょうか。

### 要旨解説

下等な動物でもそれなりに必要なもの、つまり食べること、眠ること、恐れること、つがいになることがあります。この体の欲求は人間にも動物にもあります。しかし人間がその望みを満たすには、動物のようではなく、人間として満たさなくてはなりません。雄犬は人に見られてもいてもためらうことなく雌犬と交尾をしますが、人間が同じことをすれば違法行為と見なされ、法を犯した罰が与えられます。だからこそ人間には、たとえ同じ欲求を持っていても、従うべき規則や原則が用意されているのです。カリ時代に惑わされた人間社会は、そのような規則も原則も無視するようになってしまいました。現代人は、生活に欠かせない必需品を規則や原則に従わずに手にいれており、獣と変わらぬ有害なそのような行為の結果、社会的・道徳的に墮落してしまった現況は確かに嘆くべき状態です。また現代では、父親も保護者も、子どもたちがしていることを嘆かわしく思っています。かれらが気づくべきことは、カリ時代の影響に毒された純真無垢な子どもたちが、忌まわしい交わりの犠牲になっている点です。『シュリーマド・バーガヴァタム』には、アジャーミラというブラーフマナの純真な息子が道を歩いていたとき、シュードラの男女がセックスする様子に魅了された話があります。その魅力の犠牲になったかれは、やがて放蕩生活にふけるようになります。純粋なブラーフマナの境地から、見さげはてた放蕩息子に落ちぶれてしまいました。それはすべて悪いつきあいが原因でした。当時は、アジャーミラというただ一人の犠牲者しかいなかったのですが、カリとなった現代では、哀れで無知な学生たちが毎日のように、セックスに男性を惹きつける映画の犠牲になっています。政治家と呼ばれる者たちも、クシャトリヤとしての職務の訓練を受けたわけではあり

ません。クシャトリヤは、ブラーフマナの本務が知識と指導であるように、管理する立場にいます。この節のkṣatra-bandhu (クシャトウラ・バンドウ) は、文化的・伝統的訓練を受けずに政治家の地位に昇りつめた人間を指します。いまかれらは、生活の規則や原則も知らない大衆に選ばれ、そのような高級官吏の地位にのしあがっています。本人が模範的な生活ができていないのに、はたして正しい人を選べるものでしょうか。ですから、カリ時代の影響によって、どこでも、政治的に、社会的に、宗教的にすべてが混乱状態にあり、そのため、良識ある人にはすべてが嘆かわしい状況になっているのです。

### 第23節

यद्वाम्ब ते भूरिभरावतार-  
कृतावतारस्य हरेर्धरित्रि ।  
अन्तर्हितस्य स्मरती विसृष्टा  
कर्माणि निर्वाणविलम्बितानि ॥ २३ ॥

yadvāmba te bhūri-bharāvatāra-  
kṛtāvatārasya harer dharitri  
antarhitasya smaratī viśṛṣṭā  
karmāṇi nirvāṇa-vilambitāni

yadvā—そうであるかもしれない; amba—母よ; te—あなたの; bhūri—重い; bhara—積む; avatāra—その重荷を軽くする; kṛta—した; avatārasya—化身した者; hareḥ—主シュリー・クリシュナの; dharitri—地球よ; antarhitasya—いまでは見えなくなった主の; smaratī—～について考えている間; viśṛṣṭā—為されたことすべて; karmāṇi—活動; nirvāṇa—解放; vilambitāni—伴うこと。

母なる地球よ。最高人格主神ハリは、主シュリー・クリシュナ御自身として、ただあなたの重荷を軽くするために化身されました。ここでなされたその活動はどれも超越的であり、解放への道を堅くするものです。しかしいま、主はあなたのまえから姿を消してしまった。おそらくあなたは主のなされた数々の娯楽に思いをはせ、もう見ることができなくなったことを悲しんでいるのでしょう。

### 要旨解説

主の活動には解放も含まれていますが、ニルヴァーナ (nirvāṇa) ・解放よりも味わいぶか

いものです。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、この節で使われている *nirvāṇa-vilambitāni* (ニルヴァーナ・ヴィランビターニ) は、解放の価値を低くする、と説明しています。ニルヴァーナ・解放を達成するには厳しいタパツシャ・苦行をしなくてはなりません、主はとても心優しい方ですから、地球の重荷を軽くするために化身します。主のその活動に思いをはせるだけで、ニルヴァーナから得られる喜びなど取るに足らないものを感じるようになり、主の崇高な住居に到達し、喜びに満ちた愛情奉仕をしながら主とふれあうことができるようになります。

#### 第24節

इदं ममाचक्ष्व तवाधिमूलं  
वसुन्धरे येन विकर्षितासि ।  
कालेन वा ते बलिनां बलीयसा  
सुरार्चितं किं हृतमम्ब सौभागम् ॥ २४ ॥

*idaṁ mamācakṣva tavādhi-mūlaṁ  
vasundhare yena vikarṣitāsi  
kālena vā te balinām balīyasā  
surārcitaṁ kiṁ hṛtam amba saubhagam*

*idaṁ*—これ; *mama*—私に; *ācakṣva*—どうか教えてください; *tava*—あなたの; *ādhimūlam*—あなたの悲しみの根源; *vasundhare*—すべての財産の源よ; *yena*—それによって; *vikarṣitā asi*—非常に脆弱な状態に陥って; *kālena*—時の影響によって; *vā*—あるいは; *te*—あなたの; *balinām*—非常に力強い; *balīyasā*—もっと力強い; *sura-arcitam*—半神たちが憧れる; *kim*—~かどうか; *hṛtam*—持ち去られて; *amba*—母親; *saubhagam*—幸運。

母よ。あなたはあらゆる富の源です。あなたをこれほどやつれさせてしまったその苦しみの原因を、どうか教えてください。私は考えています、最強なる者でさえ打ち砕く「時」という力強い影響が、半神たちでさえ憧れるあなたの富をすべて奪いさったのでは、と。

#### 要旨解説

主の恩寵で、どの惑星も完璧な状態で創造されています。ですから地球は、ここに住む生物たちを維持するのに必要な富をすべてそなえているばかりではなく、主が降誕すれば、地球そ

のものがあらゆる富に恵まれるので、天界の住人でさえ愛情をこめて崇拜します。しかし主の意志で、そのような地球でもすべてが瞬時に変わります。主はみずからの意志で、なにかをすることも、したことを元に戻すこともできます。ですからだれであろうと、自分は完全に満たされているとか、自分は主と独立しているとか、決して考えるものではありません。

## 第25節

धरण्यावाच

भवान् हि वेद तत्सर्वं यन्मां धर्मानुपृच्छसि ।  
चतुर्भिर्वर्तसे येन पादैर्लोकसुखावहैः ॥ २५ ॥

*dharany uvāca*

*bhavān hi veda tat sarvaṁ*

*yan mām dharmānupṛcchasi*

*caturbhir vartase yena*

*pādair loka-sukhāvahaiḥ*

*dharany uvāca*—母なる地球が答えた; *bhavān*—あなた自身; *hi*—確かに; *veda*—知っている; *tat sarvaṁ*—私に聞いたことすべて; *yat*—それ; *mām*—私から; *dharma*—宗教原則の権化よ; *anupṛcchasi*—あなたは次々と尋ねた; *caturbhiḥ*—4つで; *vartase*—あなたは存在する; *yena*—それによって; *pādaiḥ*—足によって; *loka*—すべての惑星で; *sukha-āvahaiḥ*—幸福感を高めている。

(牛の姿になっている)地球の主宰神が、(雄牛の姿になっている)宗教原則の権化に答えた。「おお、ダルマよ。あなたが尋ねたことすべてが、あなたにもわかります。いまから、すべて答えます。かつてはあなたも4本の足で立ち、主の慈悲のおかげで、全宇宙の幸せをあまねく高めていました」

## 要旨解説

宗教原則は主が作ったものであり、その法律の執行者がダルマラージャ、すなわちヤマラージャです。その原則はサツチャ・ユガでは申し分なく機能していました。トゥレーター・ユガではその4分の1がなくなり、ドウヴァーパラ・ユガでは半分になり、カリ・ユガになると、4分の1だけになり、そしてやがてゼロになって洪水が発生します。世界の幸せは、個人にとっても社会全体にとっても、宗教原則の維持と比例しています。真の勇氣は、どれほどの逆境

にあっても、この原則を守りつづけることにあります。そうであってこそ、私たちは物質界で  
幸せに生きることができ、やがて神のもとに帰っていくことができます。

### 第 26 – 30 節

सत्यं शौचं दया क्षान्तिस्त्यागः सन्तोष आर्जवम् ।  
शमो दमस्तपः साम्यं तितिक्षोपरतिः श्रुतम् ॥ २६ ॥  
ज्ञानं विरक्तिरैश्वर्यं शौर्यं तेजो बलं स्मृतिः ।  
स्वातन्त्र्यं कौशलं कान्तिर्धैर्यं मार्दवमेव च ॥ २७ ॥  
प्रागल्भ्यं प्रश्रयः शीलं सह ओजो बलं भगः ।  
गाम्भीर्यं स्थैर्यमास्तिक्यं कीर्तिर्मानोऽनहङ्कृतिः ॥ २८ ॥  
एते चान्ये च भगवन्नित्या यत्र महागुणाः ।  
प्रार्थ्या महत्त्वमिच्छद्भिर्न वियन्ति स्म कर्हिचित् ॥ २९ ॥  
तेनाहं गुणपात्रेण श्रीनिवासेन साम्प्रतम् ।  
शोचामि रहितं लोकं पाप्मना कलिनेक्षितम् ॥ ३० ॥

*satyaṁ śaucaṁ dayā kṣāntis  
tyāgaḥ santoṣa ārjavam  
śamo damas tapaḥ sāmyaṁ  
titiḥṣoparatiḥ śrutam*

*jñānaṁ viraktir aiśvaryaṁ  
śauryaṁ tejo balaṁ smṛtiḥ  
svātantryaṁ kauśalaṁ kāntir  
dhairyaṁ mārḍavam eva ca*

*prāgalbhyaṁ praśrayaḥ śīlaṁ  
saha ojo balaṁ bhagaḥ  
gāmbhīryaṁ sthairyam āstikyaṁ  
kīrtir māno 'nahaṅkṛtiḥ*

*ete cānye ca bhagavan  
nityā yatra mahā-guṇāḥ*

*prārthyā mahattvam icchadbhir  
na viyanti sma karhicit*

*tenāhaṁ guṇa-pātreṇa  
śrī-nivāsena sāmpratam  
śocāmi rahitam lokam  
pāpmanā kalinekṣitam*

satyam—誠実さ; saucam—清潔さ; dayā—他人の不幸に耐えられないこと; kṣāntiḥ—怒りにつながらる要因があっても自己抑制ができること; tyāgaḥ—寛大さ; santosaḥ—自己の満足; ārjavam—率直さ; samaḥ—心の固定; damaḥ—感覚器官の抑制; tapaḥ—自分の責任を正しく認識すること; sāmyam—友人と敵を区別しない; titikṣā—他人の侮辱に耐えること; uparatiḥ—損失と利益に無関心であること; śrutam—経典の教えに従っている; jñānam—知識（自己の悟り）; viraktiḥ—感覚の楽しみへの無執着心; aiśvaryam—指導力; śauryam—騎士道; tejaḥ—影響力; balam—不可能なことを可能にすること; smṛtiḥ—自分の正しい義務を見いだすこと; svātantryam—他人に依存しないこと; kauśalam—すべての活動を器用にこなす; kāntiḥ—美しさ; dhairyam—妨害に乱されない; mārḍavam—心優しさ; eva—そのように; ca—もまた; prāgalbhyam—巧妙さ; praśrayaḥ—優雅さ; śilam—作法をわきまえて; sahaḥ—決断力; ojaḥ—完璧な知識; balam—正しい実行; bhagaḥ—楽しみを対象; gāmbhīryam—喜々としている; sthairyam—不動性; āstikyam—忠実さ; kīrtiḥ—名声; mānaḥ—崇拜されるにふさわしい; anahaṅkṛtiḥ—奢りのないこと; ete—これらすべて; ca anye—また他の多くの物事; ca—そして; bhagavan—人格主神; nityāḥ—永遠に続いている; yatra—～の場所; mahā-guṇāḥ—偉大な気質; prārthyāḥ—持つにふさわしい; mahattvam—偉大さ; icchadbhiḥ—そのように望む者達; na—決して～ない; viyanti—劣化する; sma—いつも; karhicit—いつでも; tena—主によって; aham—私自身; guṇa-pātreṇa—すべての質の源; śrī—幸運の女神; nivāsena—休息所によって; sāmpratam—つい最近; śocāmi—私は～について考えている; rahitam—～を奪われて; lokam—惑星; pāpmanā—すべての罪の貯蔵場所によって; kalinā—カリによって; ikṣitam—見られている。

主の内に住む特質があります。(1)誠実さ、(2)清潔さ、(3)他人の不幸に耐えられないこと、(4)怒りを抑制する力、(5)自己の内で満足していること、(6)率直さ、(7)安定した心、(8)感覚器官を抑制する力、(9)責任感、(10)平等な視野、(11)忍耐力、(12)平静さ、(13)忠実さ、(14)知識、(15)感覚を楽しむ気持ちのないこと、(16)指導力、(17)騎士道精神、(18)影響力、(19)すべてを実現させる力、(20)適切な義務の遂行、(21)完全な独立性、(22)巧妙さ、(23)完璧な美しさ、

(24)晴朗な性格、(25)心優しさ、(26)明敏さ、(27)優雅さ、(28)寛大さ、(29)決断力、(30)あらゆる知識を完璧にそなえている、(31)すべてを適切に遂行する能力、(32)楽しみの対象物をすべて所有する、(33)喜びにあふれている、(34)不動性、(35)忠誠心、(36)名声、(37)崇拜に値する質、(38)奢る心のないこと、(39)（人格主神としての）存在感、(40)永遠性。そしてその他数多くの超越的な気質をそなえ、それは主とともに永遠にあり、決して主と離れることはありません。その人格主神、すべての善と美の源である主シュリー・クリシュナは、いま、この地上における崇高な娯楽を完遂させました。主がいなくなったあと、カリ時代がその影響力をあらゆる場所に浸透させており、そのために私は、このような状況に陥っている様を見て嘆きかなしんでいるのです。

### 要旨解説

地球を粉々にして、その原子の数すべてを数えることができたとしても、主の計り知れない超越的な特質を推測することはとうていできません。主アナンタデーヴァは、無数の舌を使って至高主の超越的な質を宣言し、そのことに数えきれないほどの年数を費やしても、主の特質を言いつくすことは不可能だと言われています。この節で挙げられている主の特質は、私たち人間が主を見ることのできる範囲内でわかるように列挙されているにすぎません。しかしたとえそうだとしても、これらの質はさらに多くの小さく分けることができます。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァामीは3番目の質、すなわち「他人の不幸に耐えられない」という気質を(1)服従した魂の保護、(2)献愛者の幸せ、と分けました。『バガヴァッド・ギーター』で主は、「どの魂もわたしだけに身をゆだねてほしい」と強調し、「そうしてくれるのであればあらゆる罪の反動から守る」と約束しています。服従しない魂は献愛者ではありませんし、そのために一般大衆はとくに守られているわけではありません。主は献愛者の良き望みをすべて満たしてあげたいと考えていますから、超越的な愛情奉仕に真剣に励んでいる献愛者をとくに注意深く見守っています。そして、そのような純粋な献愛者が神のもとに帰る道において、責任をまっとうできるよう手をさしのべます。10番目に挙げた質に「だれにでも等しく親切な方」と表現されていますが、それは太陽が光をだれにでも等しく注ぐようなものです。それでも、太陽の光をすべて受けとれない人々もたくさんいます。同じように、「身をゆだねさえすればあらゆる面でわたしが守る、と約束しているのに、不運な者たちはその気持ちを受けいれようとせず、そのためにあらゆる苦しみにさいなまれている」、と主は言います。主はだれもが幸せになってほしいと思っていますが、不運な生命体は、ただ忌まわしいつきあいのために主の教えをそのまま受けとめられないのですが、そのことで主が非難される筋合いはありません。主は、

献愛者だけに「幸せを願う者」と呼ばれています。とかく主は献愛者だけをひいきにしていると言われがちですが、見きわめるべきところは、主の平等な心を受けいれるか拒むかという点にあります。

主は必ず約束を守ります。必ず守る、と約束すれば、主はなにがあっても実行します。主から、あるいは主の真の代表者・精神指導者から与えられた義務を確実に果たすことが純粋な献愛者の義務です。その条件を満たささえすれば、あとは主がすべてを遂行します。

主の責任にも独特の質があります。しかしじつは、主に責任はありません。主の仕事はすべて、任命されたさまざまなエネルギーによって実行されるからです。しかしそれでも、超越的な娯楽をとおしてさまざまな役目を進んではたしています。幼いとき、牛飼いの役割をはたしました。ナンダ・マハーラージャの子として、主は自分の責任を完璧にまっとうしたのです。同じように、マハーラージャ・ヴァスデーヴァの子息としてクシャトリヤの任命を完遂し、闘魂みなぎるクシャトリヤの腕前を発揮しました。クシャトリヤの王は、ほとんどの場合、妻を得るのに戦ったり誘拐したりしなくてはなりません。クシャトリヤならこのような行為をとおして、妻としたい女性に騎士道の力量を誇示しなくてはなりませんし、またそのことで、クシャトリヤの娘は、自分の夫になってほしい男性の武勇を見ることができるところです。人格主神シュリー・ラーマでさえ、結婚式のときにその騎士道精神を見せています。主はハラダヌルと呼ばれていた最強の弓を折ることで、あらゆる富の母であるシーターデーヴィーを妻としました。クシャトリヤ精神は結婚式の会場で示されますが、その戦闘行為が咎められるわけではありません。主シュリー・クリシュナ責任をまっとうしました。主は16,000人以上の妻がいましたが、その人数の分、騎士道精神あふれたクシャトリヤとして戦い、そして妻を獲得しました。16,000人の妻を得るために16,000回戦うことは、最高人格主神だけにできることです。同じように、主はさまざまな超越的娯楽で完全に責任をまっとうしました。

14番目の質である「知識」は、次のように5つの項目に分けられます。(1)知性、(2)感謝、(3)特定の場所、主題、時に応じた状況を理解する力、(4)すべてに関する完璧な知識、(5)自己に関する知識。愚か者だけが恩人に感謝しません。しかし主は、自分をのぞいてだれからも恩恵をもらう必要はありません。主はみずから完全な方だからです。それでも、主は献愛者からの純粋無垢な奉仕をありがたく感じます。主は献愛者の素朴で無条件の奉仕に感謝し、奉仕を返してかれらの愛情に応えようとします。もちろん、献愛者はそのような望みは少しもないのですが、主への超越的な奉仕そのものが献愛者にとっては超越的な恩恵ですから、主に仕えてなにかを授かろうとは思っていません。ヴェーダの格言 *sarvam khalv idam brahma* (サルヴァンム カハラヴ イダンム ブラフマ) という言葉から私たちが理解できるのは、主は、ラフマジョーティ

というみずからの輝きによって万物の内にも外にも遍在するということ、またそれは私たちに  
とって物質界があまねく存在しているように、主は全知であるということです。

主は他の生命体すべてとははっきり違う特別の美しさをそなえています、とりわけ主の創  
造物のなかでもっとも美しい方・ラーダーラーニーの心を惹きつけてはなさない特別の美しさ  
に満たされています。ですから主はマダナ・モーハナ、すなわち「天使の心さえ奪ってしまう  
者」として知られています。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミー・プラブは、主のその  
他の超越的質を細かく分析し、主シュリー・クリシュナこそが絶対的最高人格主神（パラブラ  
フマン）であると確証しています。主は想像を絶するエネルギーを持つ方だからこそ全能であ  
り、そのことから、ヨーゲーシュヴァラ、すなわち「すべての神秘的力の最高の主人」という  
名前でも知られています。主はヨーゲーシュヴァラとして、精神的で、永遠性・喜び・知識が結  
合された姿をそなえています。献愛者でない者は、主の知識にそなわる活動的な特質が理解で  
きません。なぜなら、たんに「知識」という主の永遠な形を知るだけで満足しているからです。  
偉大な魂たちは、主と同じ段階の知識を得たいと考えています。それは、その他の知識はどれ  
もいつまでたっても不十分で、変わりつづけ、底が知れているということですが、いっぽう主  
の知識は永遠に不動で、底が知れない、ということの意味しています。シュリーラ・スータ・  
ゴースヴァーミーは『シュリーマド・バーガヴァタム』で確証しています、主はドウヴァーラ  
カーの市民たちに毎日のように見られていた、それでもかれらは主をなんどもなんども見たい  
と願っていた、と。生命体は、主の特質を窮極の目標として評価することはできるのですが、  
それらをすべて把握することはできません。物質界はマハトウ・タットヴァによって作られ、  
それは、原因の海で主がヨーガ・ニドラー・神秘なる眠りのなかで作った主の夢の世界です。  
それでも、創造界は主の現実の創造に見えます。これが意味することは、たとえ主が夢として  
見ている状態も、じつは現実の表われだということです。ですから主は一切万物をみずから超  
越的な支配下に置くことができ、こうしてどこにいつ現われても、それを完璧に行なうのです。

主は上記の特質をすべてそなえていますから、創造界にある現象をすべて維持し、そうす  
ることで、主に殺された敵にでさえ解放の境地を授けます。主は解放された頂点の魂の心でさえ  
魅了するため、ブラフマーやシヴァというもっとも偉大な半神たちにでさえ崇拜されています。  
主はプルシャ・アヴァターラとして化身しても、創造エネルギーの主人です。創造物質エネル  
ギーは主の指揮下で機能しており、それは『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第10節）で  
確証されています。主は物質エネルギーを支配するスイッチともいふべき方であり、無数の宇  
宙内の物質エネルギーを支配していることから、全宇宙の無数の化身の根本原因です。1つの  
宇宙だけでも50万人以上のマヌの化身が現われ、それ以外にも、さまざまな宇宙にさまざま

化身が現われます。しかしマハトウ・タットヴァを超えた精神界で化身の降誕はなく、さまざまなヴァイクンタ惑星のなかには主の完全拡張体が存在しています。精神界の惑星の数は、マハトウ・タットヴァにある無数の宇宙にある惑星の少なくとも3倍はあります。そして主のナーラーヤナの姿すべては、主のヴァースデーヴァ様相の拡張ですから、主は同時にヴァースデーヴァ、ナーラーヤナ、クリシュナでもあります。主は、*śrī-kṛṣṇa govinda hare murāre, he nātha nārāyaṇa vāsudeva* (シュリー・クリシュナ ゴーヴィンダ ハレー ムラーレー、ヘー ナータハ、ナーラーヤナ ヴァースデーヴァ)、すなわちどれも一つの存在なのです。ですから主の特質は、どれほど偉大な人間であっても数えつくすことはできません。

### 第31節

आत्मानं चानुशोचामि भवन्तं चामरोत्तमम् ।  
देवान् पितृनृषीन् साधून् सर्वान् वर्णास्तथाश्रमान् ॥ ३१ ॥

*ātmānam cānuśocāmi*  
*bhavantam cāmarottamam*  
*devān pitṛṇ ṛṣīn sādḥūn*  
*sarvān varṇāns tathāśramān*

*ātmānam*—私自身; *ca*—もまた; *anuśocāmi*—嘆いている; *bhavantam*—あなた自身; *ca*—～同様; *amara-uttamam*—半神の中の第一人者; *devān*—半神達について; *pitṛṇ*—ピトゥリローカ惑星の住人達; *ṛṣīn*—聖者達について; *sādḥūn*—献愛者達について; *sarvān*—彼ら全員; *varṇān*—部分; *tathā*—もまた; *āśramān*—人間社会の階級。

半神の第一人者よ。私は自分のことも、そしてあなたのことも、さらにはすべての半神たち、聖者たち、ピトゥリローカの住人たち、主の献愛者たち、人間社会におけるヴァルナとアーシュラマ体制に従順な人々すべてについても考えています。

### 要旨解説

人間生活の完成を達成するためには、人間と半神、聖者、ピトゥリローカの住人、主の献愛者たちの協力、そして生活階級を科学的に区分するヴァルナとアーシュラマ制度が必要です。ですから、人間生活と動物生活の違いは、半神たちとの関連をとおして聖者の経験に導かれながら科学的なヴァルナとアーシュラマ体制に従うことから始まり、そしてやがて最高絶対真理

者、人格主神、主シュリー・クリシュナとの永遠の関係確立という頂点にまで徐々に高められていきます。神が作り、動物の意識から人間の意識へ、そして人間の意識から神聖な意識へ高めるためだけにあるヴァルナーシュラマ・ダルマは、愚かさが高じることで荒廃し、平和で進歩的な生活を築くために用意されたこの制度が途絶えてしまいます。カリ時代という毒蛇の最初の攻撃は神が作ったヴァルナーシュラマ・ダルマに向けられ、その結果、ブラーフマナの正しい資質をそなえた人がシュードラと呼ばれ、シュードラの質しかない人間がブラーフマナとしてまかりとおるようになっていますが、それはまちがった生得権の主張にもとづいています。生得権を主張してブラーフマナになることは、資格の一つとしては挙げられるかもしれませんが、正しくありません。ブラーフマナのほんとうの気質は心と感覚の抑制にあり、さらに忍耐心、正直さ、清潔さ、知識、誠実、ヴェーダ知識に対する熱意と信念を修練することにあります。いまでは必要な資質は考慮されなくなっており、まちがった生得権の主張が、大衆にもてはやされた如才ない詩人が書いた『ラーマ・チャリタ・マーナサ』によって支えられています。

これはすべて、カリ時代の影響の結果です。だからこそ、雌牛の姿となった母なる地球はこの嘆かわしい状態を悲しんでいるのです。

### 第 3 2 - 3 3 節

ब्रह्मादयो बहुतिथं यदप्राप्तोक्ष-  
 कामास्तपः समचरन् भगवत्प्रपन्नाः ।  
 सा श्रीः स्ववासमरविन्दवनं विहाय  
 यत्पादसौभाग्यं भजतेऽनुरक्ता ॥ ३२ ॥  
 तस्याहमब्जकुलिशाङ्कुशकेतुकैः  
 श्रीमत्यदैर्भगवतः समलङ्कृताः ।  
 त्रीनत्यरोच उपलभ्य ततो विभूतिं  
 लोकान् स मां व्यसृजदुस्मयतीं तदन्ते ॥ ३३ ॥

brahmādayo bahu-titham yad-apāṅga-mokṣa-  
 kāmās tapaḥ samacaran bhagavat-prapannāḥ  
 sā śrīḥ sva-vāsam aravinda-vanam vihāya  
 yat-pāda-saubhagam alam bhajate 'nuraktā  
 tasyāham abja-kuliśāṅkuśa-ketu-ketaiḥ  
 śrīmat-padair bhagavataḥ samalaṅkṛtāṅgī

*trīn atyaroca upalabhya tato vibhūtim*  
*lokān sa mām vyaṣṛjad utsmayatīm tad-ante*

*brahma-ādayaḥ*—ブラフマーのような半神達; *bahu-titham*—何年もの間; *yat*—ラクシュミー、幸運の女神の; *apāṅga-mokṣa*—慈悲のまなざし; *kāmāḥ*—～を望んで; *tapāḥ*—苦行; *samacaran*—実行している; *bhagavat*—人格主神に; *praṇannāḥ*—服従して; *sā*—彼女（幸運の女神）; *śrīḥ*—ラクシュミー; *sva-vāsam*—彼女の住居; *aravinda-vanam*—蓮華の花の森; *vihāya*—～を後にして; *yat*—～である者の; *pāda*—足; *saubhagam*—すべてにおいて至福に満ちて; *alam*—ためらうことなく; *bhajate*—崇拜する; *anuraktā*—執着して; *tasya*—主の; *aham*—私自身; *abja*—蓮華の花; *kuliśa*—雷; *ankuśa*—象を操る棒; *ketu*—旗; *ketaiḥ*—刻印; *śrīmat*—すべての富の所有者; *padaiḥ*—足の裏によって; *bhagavataḥ*—人格主神の; *samalaṅkṛta-aṅgī*—体がそのように飾られている者の; *trīn*—3; *ati*—取ってかわっている; *aroce*—美しく飾られて; *upalabhya*—到達して; *tataḥ*—その後; *vibhūtim*—特別の力; *lokān*—天体系; *saḥ*—彼; *mām*—私を; *vyaṣṛjat*—捨てた; *utsmayatīm*—得意に思っていたとき; *tad-ante*—終わりに。

何日間も人格主神に服従したブラフマーや半神たちは、慈悲のまなざしに満ちたラクシュミー・幸運の女神に救いを求めましたが、そのラクシュミーは、蓮華の花に満ちた自分の住居を捨てて、主の蓮華の御足に一心に仕えました。私は主の蓮華の御足に刻まれた旗・雷・象使いの棒・蓮華の印で飾られることで特別の力を授けられ、ラクシュミーの代わりに三界すべての幸運を任せられていました。しかし最後に、自分の幸運さを感じていたとき、主は私を置いて去っていかれたのです。

### 要旨解説

世界の美しさと富は主の力で増すのであり、人間が作った計画はなにもできません。主シュリー・クリシュナが地上にいたとき、その蓮華の御足にある特別の印が地面に刻まれましたが、そのすばらしい恩寵があったからこそ、地球全体が完璧な環境に包まれました。言いかえると、川、海、森、丘、鉱山など、人間と動物の必需品を提供する代表者たちがそれぞれの義務を充分にはたしていたということです。そのために地球の富は、3つの天体系の惑星すべてを凌ぐほどの富に恵まれたのです。ですから私たちは主の恩寵がいつも地上に降りそそがれるよう祈るべきであり、そうすれば、主のいわれない慈悲を授かり、生活に必要なものをすべて授かって幸せに暮らすことができます。「では、至高主が地球での使命をすべてまっとうし、自分の住居に戻ってってしまうのであれば、どうやって主をここに引きとめられるのか」と聞く

人がいるかもしれませんが。その答は、主を引きとめる必要はない、と言えます。主はどこにでもいる方ですから、主が望みさえすればいつも私たちといることができるのです。遍在する力を持つ主は、私たちが、聞き、唱え、思いだすなどの方法をとおして主への献愛奉仕に専念していれば、主はいつでも私たちとともにいるのです。

主と関係のないものはこの世にありません。私たちがただ一つ学ばなくてはならないのは、その関係の源を探しだし、そうすることで、冒瀆することのない奉仕をして主と結ばれるということです。私たちは、主の超越的な音をとおして主と結ばれます。主の聖なる名前と主自身は同じであり、主の聖なる名前を冒瀆することなく唱える人は、主が目のまえにいることをすぐに悟ります。ラジオの音声を聞けば、その音の源と部分的に結ばれていることがわかるように、超越的な音を口にすれば、私たちは主の存在をありのままに感じることができるのです。現代ではすべてがカリの汚染によって穢れていますが、経典と主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは、「主の聖なる名前を唱えればすぐにその穢れから解放され、少しずつ超越的な境地に高められ、神のもとに戻っていくことができる」と私たちに説いています。主の聖なる名前を冒瀆することなく唱える人は主と同じように吉兆な境地に入り、主の純粋な献愛者が世界中に巻き起こした運動は、問題だらけの世界情勢をすぐに変えることができます。主の聖なる名前を広める方法だけが、カリ時代の悪影響をすべて取りのぞいてくれます。

### 第34節

यो वै ममातिभरमासुरवंशराज्ञा-  
मक्षौहिणीशतमपानुददात्मतन्त्रः ।  
त्वां दुःस्थमूनपदमात्मनि पौरुषेण  
सम्पादयन् यदुषु रम्यमबिभ्रद्राम् ॥ ३४ ॥

*yo vai mamātibharam āsura-vaṁśa-rājñām  
akṣauhiṇī-śatam apānudad ātma-tantraḥ  
tvām duḥstham ūna-padam ātmani pauruṣeṇa  
sampādayan yaduṣu ramyam abibhrad aṅgam*

yaḥ—～である主; vai—確かに; mama—私のもの; ati-bharam—あまりにも負担となる; āsura-vaṁśa—不信心者達; rājñām—王達の; akṣauhiṇī—1部隊 (注); śatam—何百ものそのような区分; apānudad—根絶させた; ātma-tantraḥ—自己充実; tvām—あなたに; duḥstham—苦境に落とし入れられて; ūna-padam—立つ力を奪われて; ātmani—内的; pauruṣeṇa—エネルギーによっ

て; *sampādayan*—実行するために; *yaduṣu*—ヤドウ家の中に; *ramyam*—超越的に美しい; *abibhrat*—accepted; *aṅgam*—body.

おお、宗教の権化よ。私は、無神論の王たちが配備した邪悪な軍隊によってひじょうに苦しめられましたが、人格主神の恩寵で救われました。同じようにあなたも、立ちつづける力もないほどの苦境にありましたが、そのようなあなたを救うために主はヤドウ家のなかに内的力を使って化身となって現われました。

### 要旨解説

アスラたちは、他人の幸せをぶちこわしてでも自分の感覚を満たす生活を楽しみたいと思っています。この野心を満たすために、アスラたち、とりわけ無神論の王や国の指導者は、あらゆる種類の武器をそろえて平和な世界に戦争を起こそうとしています。かれらには権力増大の野心しかなく、母なる地球はそのような邪悪な軍隊が増えたことで耐えがたい苦痛を感じています。アスラの人口が増えれば、宗教原則に従う人々、とくに献愛者、あるいはデーヴァたちは不幸になっていきます。

そのような状況で人格主神は化身となって現われ、不要なアスラたちを抹殺し、真実の宗教原則を再確立させます。これが、主シュリー・クリシュナの使命であり、主はその使命をまっとうしました。

注・アクシャウヒニ一部隊は、戦闘馬車 21,870 台、象 21,870 頭、歩兵 109,350 人、馬 65,610 頭で構成されている。

### 第 3 5 節

का वा सहेत विरहं पुरुषोत्तमस्य  
प्रेमावलोकुरुचिरस्मितवल्गुजल्पैः ।  
स्थैर्यं समानमहरन्मधुमानिनीनां  
रोमोत्सवो मम यदङ्घ्रिविटङ्कितायाः ॥ ३५ ॥

*kā vā saheta viraham puruṣottamasya  
pre māvaloka-rucira-smita-valgu-jalpaiḥ  
sthairyaṁ samānam aharan madhu-māninīnām  
romotsavo mama yad-aṅghri-ṣiṭaṅkitāyāḥ*

*kā*—～である者; *vā*—どちらも; *saheta*—耐えられる; *viraham*—別れ; *puruṣa-uttamasya*—最高人格主神の; *prema*—愛情のこもった; *avaloka*—見つめている; *rucira-smita*—喜ばしい微笑み; *valgu-jalpaiḥ*—心のこもった哀願; *sthairyam*—重力; *sa-mānam*—激しい怒りと共に; *aharat*—征服した; *madhu*—愛する人; *mānininām*—サツチャバーマーのような女性達; *roma-utsavaḥ*—喜びのために逆立つ髪の毛; *mama*—私のもの; *yat*—～である者の; *aṅghri*—足; *viṭaṅkitāyāḥ*—～で刻まれた。

ですから、最高人格主神との別れの苦悩に耐えられる者がはたしているのでしょうか。主は重力さえ超越し、主を心から愛するサツチャバーマーの激しい怒りを、愛情あふれる微笑みと、喜ばしいまなざしと、心こめた哀願でやわらげました。主が私（地球）の上を旅するとき、私の心はその蓮華の御足の埃で歓喜に包まれ、私の体は草花によって豊かに包まれました。喜びから私の髪の毛が逆立つように。

### 要旨解説

主は、ドウヴァーラカーから離れて何千人もの女王たちと離れる機会がありましたが、地球との関係にかぎっては、主はその蓮華の御足で地上を歩いていたのですから、離れる機会はありませんでした。ですから、主が地上から離れて精神的住居に戻ってしまったときの地球の惜別の思いはさらにつらいものだったのです。

### 第36節

तयोरेवं कथयतोः पृथिवीधर्मयोस्तदा ।  
परीक्षिन्नाम राजर्षिः प्रासः प्राचीं सरस्वतीम् ॥ ३६ ॥

*tayor evaṁ kathayatoḥ*  
*ṣṛthivī-dharmayos tadā*  
*parikṣin nāma rājarṣiḥ*  
*prāptaḥ prācīm sarasvatīm*

*tayoḥ*—彼らの間; *evaṁ*—そのように; *kathayatoḥ*—会話をして; *ṣṛthivī*—地球; *dharmayoḥ*—そして宗教の権化; *tadā*—その時; *parikṣit*—パリークシット王; *nāma*—その名前の; *rāja-ṛṣiḥ*—王達の中の聖者; *prāptaḥ*—到着した; *prācīm*—東方に流れている; *sarasvatīm*—サラスヴァティー川。

地球と宗教の権化がどのように話していたとき、神聖なパリークシット王が、東に向かって流れるサラスヴァティー川の岸辺に到着した。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第16章、「パリークシットはどのようにカリ時代を受け入れたか」の要旨解説を終了します。